

## インドの川、日本の川

NPO「ブナの森」 代表 長岡 昇

インド亜大陸には、二つの大河が流れています。ガンジス川とインダス川です。どちらもヒマラヤ山脈を水源とし、それぞれインドとパキスタンの平原を流れてインド洋に注いでいます。長さはガンジス川が約 2500 キロ（北海道の稚内から沖縄本島的那覇までの距離に相当）、インダス川が約 3000 キロ（稚内から沖縄本島の西にある石垣島までの距離に相当）です。世界にはナイル川やアマゾン川、揚子江（長江）、ミシシッピ川といった 6000 キロを超える川があり、インダス川もガンジス川も「長い川世界ランキング」ではそれぞれ 22 位と 40 位とだいぶランクが落ちるのですが、日本の河川に比べれば、長大な川と断言していいでしょう。

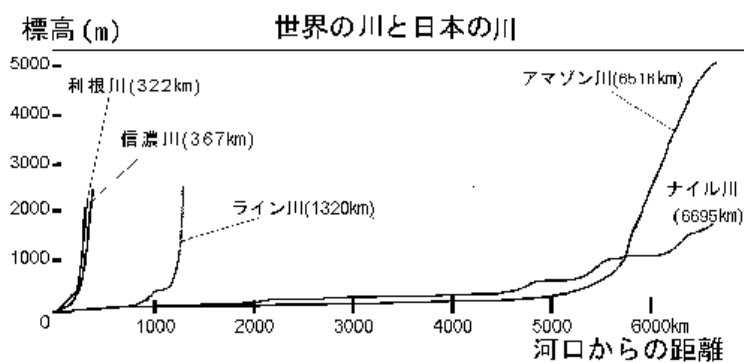
長いだけではありません。水質も日本の川とは大いに異なります。日本の川を流れる水のほとんどはミネラル分の少ない軟水ですが、二つの川を流れる水は硬水です。しかも、ミネラル分がやや濃い「一時硬水」ではなく、ミネラル分が非常に濃い「永久硬水」と呼ばれる水です。この水は何回煮沸してもミネラル分が浮いてきて、軟水に近い水にはなりません。従って、飲み水としてはあまり好ましくないのですが、インドでもパキスタンでも飲料水として広く使われています。両国で腎臓病や胃腸の病気を患う人がやや多いのは、このことと無関係ではないと考えられます。

私が「安全な水」という表現や考え方があることを知ったのは、1992 年から 3 年間、新聞社のニューデリー特派員として 3 年間この地域で暮らし、仕事をしてからです。永久硬水でもきれいに濾過すれば、なんとか飲料水として使うことができますが、多くの地域では衛生状態の良くない井戸水や汲み上げ水を濾過しないまま使っています。国連の統計によれば、世界にはまだ、日常生活で「安全な水」を確保できない人が 7 億 6800 万人もいます（2014 年 3 月 21 日のユニセフ発表）。そのうちの 1 億人以上がインドとパキスタンの住民です。多くの人が実に厳しい生活を強いられています。

厳しいのは水だけではありません。インドとパキスタンの気候、とくに内陸部の気候は過酷です。5 月、6 月の酷暑期には温度計は 50 度まで跳ね上がります。大地はカチンカチンに乾き切り、鍬で耕そうとしても跳ね返されてしまうほどです。それでも、この大地で人間が生きていくことができるのは、6 月の下旬になるとモンスーンと呼ばれる季節風が吹き、雨を降らせてくれるからです。降雨によって土は柔らかくなり、やっと農業ができるようになるのです。雨季が終わっても、二つの大河から灌漑用の水路で水を引いて小麦や野菜を育てることができます。世界四大文明の一つ、インダス文明もこの大河の恵みで成立したものの

です。

インドの川と比べると、日本の川は実にきれいです。生活用の雑排水などが流れ込んで汚れているところもありますが、上流部ではそのまま飲料水として使えるところがほとんどです。ミネラル分もそれほど多くない軟水です。なぜ、私たちが住む日本はそんなに水に恵まれているのか。源流部から河口までの距離を横軸、標高を縦軸にした下のグラフで比べてみれば、その理由は明らかです。山に降った雨が速やかに海に注いでしまうからです。海に囲まれ、1年を通して雨に恵まれている日本のような国は、実はそれほど多くはありません。



《Source》

[http://gakusyu.shizuoka-c.ed.jp/shakai/sekaino\\_kuniguni/16\\_02\\_chikei\\_kawa.html](http://gakusyu.shizuoka-c.ed.jp/shakai/sekaino_kuniguni/16_02_chikei_kawa.html)

よく、「日本には資源が何も無い。だから、汗水たらして働いて物やサービスを生み出して売るしかないのだ」と言われます。本当にそうでしょうか？ 日本では、生きるうえで必要な水が豊富にあり、しかもその多くは「とても安全な水」です。それをいつでも手に入れることができます。生きものにとって、水以上に重要な資源がこの地球上にあるのでしょうか？ 水という資源に着目するなら、実は日本は「第一級の資源大国」と言ってもおかしくはないのです。

かつて日本を訪れた中東の産油国サウジアラビアの国王の話を思い出します。アメリカに次いで日本を訪れ、最新式の自動車製造工場などを視察した国王は箱根の湖畔のホテルに宿泊しました。翌朝、湖の周りに広がる森を目にして、国王はしみじみこう言ったのです。「最新式の工場も新幹線もそれほどうらやましいとは思わない。時間と金をかければ、わが国でも作れないことはない。けれども、この一面に広がる森を作ることはできない。つくづく羨ましい」

いつもあるもの。すぐ手が届くところにあふれているもの。人はそういうものに慣れてしまうと、有難いとも恵まれているとも思わなくなるものです。それどころか、日本では子供

の水の事故を防ぐため、小さい時から「川に近づいてはいけない」と教えられて育ちます。それはそれで十分理由のあることですが、それが行き過ぎると、川や水に対する考え方そのものが歪（ゆが）んでしまうのではないのでしょうか。これからは、水の事故を防ぐ努力に加えて、そうした歪みを正していく努力をもっと重ねることが大切だと思うのです。